



但馬国府・国分寺館ニュース

編集・発行

2014.11 第39号

但馬国府・国分寺館
Museum of Tajima Kokufu and Kokubunji

〒669-5305 兵庫県豊岡市日高町祇布 808
TEL 0796-42-6111 fax 0796-42-6112
http://www3.city.toyooka.lg.jp/kokubunjikan/



弥生時代(右)と古墳時代(左)のガラス玉類 豊岡市内各所出土

西日本で出土する弥生時代のガラス玉の大半は空色。古墳時代になると、群青色や緑色、橙色など多様な色の玉が登場し、彩り豊かになりました。

第33回企画展 いろどり 彩一色に表された思い

美しい自然に囲まれた日本。四季の変化もその美しさを際立たせています。日本語には数多くの色彩表現があり、古来より豊かな色彩文化をもっていたことが知られています。色の名前には、季節の移ろいや王朝の雅、日常生活のひとこまなど、それぞれの時代に生きた人々の色に込めた思いが秘められているのです。

今回の展覧会では、主に豊岡市内から出土した資料や工芸品、民俗資料、絵画などをもとに、色の名前を時代の流れに沿って紹介します。この機会に、日本人と色との関わりの歴史を知っていただき、毎日の生活に少しでも彩りを添えていただければ幸いです。

■会期 平成26年11月13日(木)
～平成27年2月11日(水・祝)

■記載している色の名前や色見本はイメージであり、当時の色名や色合いを示したものではありません。

■展示協力機関(50音順・敬称略)

朝来市教育委員会 朝来市埋蔵文化財センター
いずし古代学習館 出石皿そば協同組合 出石史料館
東京国立博物館 豊岡市立出土文化財管理センター
豊岡市立美術館伊藤清永記念館 西谷菓子舗
日本・モンゴル民族博物館 与謝野町教育委員会

● 色彩文化の原形—縄文～古墳時代—

文字のない時代の色彩文化を知る手がかりは、発掘調査によるしかありません。出土資料に見られる色彩の大半は、赤。土器を彩ったり、墓に塗られたり、さまざまな用途で使われていました。赤の語源は「明」。「暗(=黒)」に対する語であり、私たちに光や熱を与える太陽と火を表す色なのです。文字のない時代の人々は、生きるために欠かすことのできない太陽や火に畏敬の念を抱き、生活の中に取り入れていったのでしょう。



真朱 赤・黒で彩られた桶
(弥生時代/南八代田遺跡)



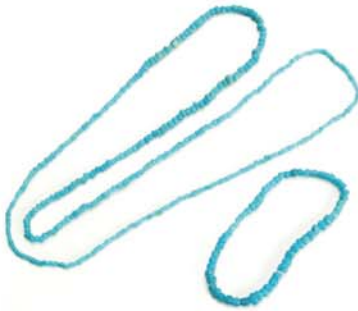
弁柄色 赤く塗られた死者の枕
(古墳時代/中郷深谷遺跡)



真朱 朱に染められた銅鏡
(古墳時代/下安良古墳)



弁柄色 赤く染められた石室
(古墳時代/禁裡塚古墳)



空色 ガラス小玉
(弥生時代/入佐山墳墓群)



群青色 ガラス小玉などの玉類
(古墳時代/大師山古墳群)



若緑 石の腕飾り
(古墳時代/東南山4号墳/
朝来市埋蔵文化財センター蔵)



金色 金の耳飾り
(古墳時代/香住門谷古墳群)

● 色の規範化—飛鳥・奈良時代—

飛鳥・奈良時代は、大陸から先進の文物が伝えられた時代。寺院や宮殿の建築様式や仏像、仏画といった美術工芸品はもちろん、思想や法律、国家体制などももたらされたのです。

その一つに、「冠位十二階」など地位・身分の上下を色で表す位色の制度があります。この制度によって色彩は規範化され、色の選択は為政者がおこなうようになりました。位色の制度は、形を変えながらも平安時代まで受け継がれました。



古代寺院の色 (奈良時代/但馬国分寺 塔跡復元模型)



弁柄色 赤く塗られた土器 (奈良時代/但馬国分寺跡)



白土 漆喰壁の破片 (奈良時代/但馬国分寺跡)

● 王朝の美—平安時代—

平安時代には、中国の模倣ではなく、日本の風土や気候に合った国風文化が生まれました。「紅梅」や「萌黄」など自然から生まれた風雅な色名が、『源氏物語』『枕草子』といった王朝文学を彩っていたのです。また、宮廷の女官が着た十二単に用いられる襲の色目には、優美な名称が付けられています。

ただし、優美な色彩に恵まれていたのは平安京の王朝貴族のみ。大半の人々は質素な色に囲まれて暮らしていたのです。



白磁輪花文皿
白磁 (平安時代/祢布ヶ森遺跡)



緑釉緑彩耳皿
若緑 (平安時代/但馬国分寺跡)



若緑 緑釉陶器 (平安時代/但馬国分寺跡・祢布ヶ森遺跡)

Topics 襲の色目

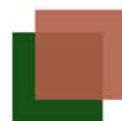
平安時代の女房たちは、季節ごとに色の異なる衣を重ね着したり、袷仕立てされた生地^{あわせ}の表地と裏地の配色を楽しんだりして、衣の色彩で季節の移ろいを表現していました。

四季折々の自然の色彩が取り入れられた「襲の色目」は、当時の女官たちが身に付けておくべき教養の一つとされていました。



春・梅重

表地：濃紅、裏地：紅梅
紅梅の花の重なりを表す



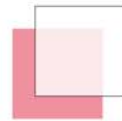
夏・花橘

表地：朽葉、裏地：青
青葉の間からのぞく橘の花を表す



秋・紫苑

表地：紫、裏地：蘇芳
キク科の紫苑の花の色を表す



冬・雪の下

表地：白、裏地：紅梅
雪に埋もれた紅梅を表す

四季の色目の例

● 簡潔・枯淡な武家の色—鎌倉～室町時代—

鎌倉・室町時代の主役は、公家から武家へと移りました。それにより、貴族らしい華やかな色彩は姿を消しました。あらゆる色彩を墨色の中に見極めようとした雪舟の水墨画は、この時代を代表する芸術作品と言えるでしょう。枯淡・閑寂を極める「侘び・寂び」の美学は、この時代の特性とされています。

また、「土器色」「柿渋色」「檜皮色」など簡潔な色名も多く誕生しました。これらは、質実な武家の暮らしから生まれてきたものでしょう。



狩野探幽 山水図
墨 (江戸時代/旧中和家蔵)

Topics 水墨画

室町時代、墨の濃淡だけで描く水墨画の様式が完成しました。「墨に五彩あり」と言われるように、水墨画には無限の色彩が表現されているのです。水墨画の成立に大きな影響を与えたのは、禅宗。禅宗寺院からは彩色が消え、岩石と砂利を組み合わせた枯山水の庭園が造られるなど、簡素さと幽玄・侘びが重んじられるようになりました。



土師器小皿
土器色 (室町時代/マガ谷遺跡)



青磁碗
青磁色 (鎌倉時代/但馬国分寺跡)

● 色彩の庶民化—江戸時代—

江戸時代の文化の担い手は、為政者ではなく町人。そのため、個人の嗜好を反映した新たな色が多く生まれました。当時の流行色の多くは、茶色系・鼠色系・藍色系など渋みが強い中間色。いずれも庶民にも手に入りやすい安価な染料を用いたものでした。特に、茶色と鼠色は「四十八茶百鼠」と称され、多くの色名が生み出されたのです。これらの色は、庶民の心意気^{いきま}“粋”の美意識に合う色として広く受け入れられ、大流行しました。



瑠璃猪口
瑠璃色 (江戸時代/旧中和家蔵)



染付酒器瓶
呉須色 (江戸時代/旧中和家蔵)



色絵輪花金丸皿
金色 (江戸時代/旧中和家蔵)



櫛・簪・弁
龍甲色 (江戸~大正時代)

Topics 出石焼

出石焼は、透き通るような白が特徴の磁器で、出石そばの小皿をはじめとした日用品や工芸品など多彩な種類が生産されています。その起源は天明4年(1784)。主に伊万里(佐賀県)を真似た染付を生産していましたが、明治9年(1876)に設立された^{えいしん}益進社によって、現代の出石焼のルーツとなる白磁の生産体制が確立されました。



出石焼
白磁 (昭和時代/旧中和家蔵)

● 関連事業のお知らせ

■講演会「王朝文学の色彩～源氏物語と枕草子を中心として～」

日 時：平成27年1月10日(土) 午後1時30分～

会 場：但馬国府・国分寺館

映像ホール

講 師：福嶋昭治さん

(京都橘大学教授)

*聴講には入館料が必要です。

予約は不要。



■学芸員講座「しろ、くろ、あか、あを—日本の色の歴史—」

日 時：平成26年12月13日(土) 午後1時30分～

会 場：但馬国府・国分寺館 映像ホール

講 師：前岡 孝彰 (当館学芸員)

*聴講には入館料が必要です。予約は不要。

*講座の後には、企画展の展示解説をおこないます。

● 但馬国府・国分寺館のご利用案内



国分寺館キャラクター
たじまる・くにひめ

- 開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
- 休 館 日 水曜日(祝日は開館し、翌日休館)
年末年始(12月28日～1月4日)
- 入 館 料 一 般 500(400)円
高 校 生 200(150)円
小中学生 150(100)円
* () は20名様以上
* 県内小中学生は無料
* 65歳以上の方は半額
- 最新情報はホームページをご覧ください。
<http://www.3.city.toyooka.lg.jp/kokubunjikan/>
- facebook ページ公開中!
<http://www.facebook.com/tajima.kokubunjikan>